

南加賀の山間寺院

垣内 光次郎

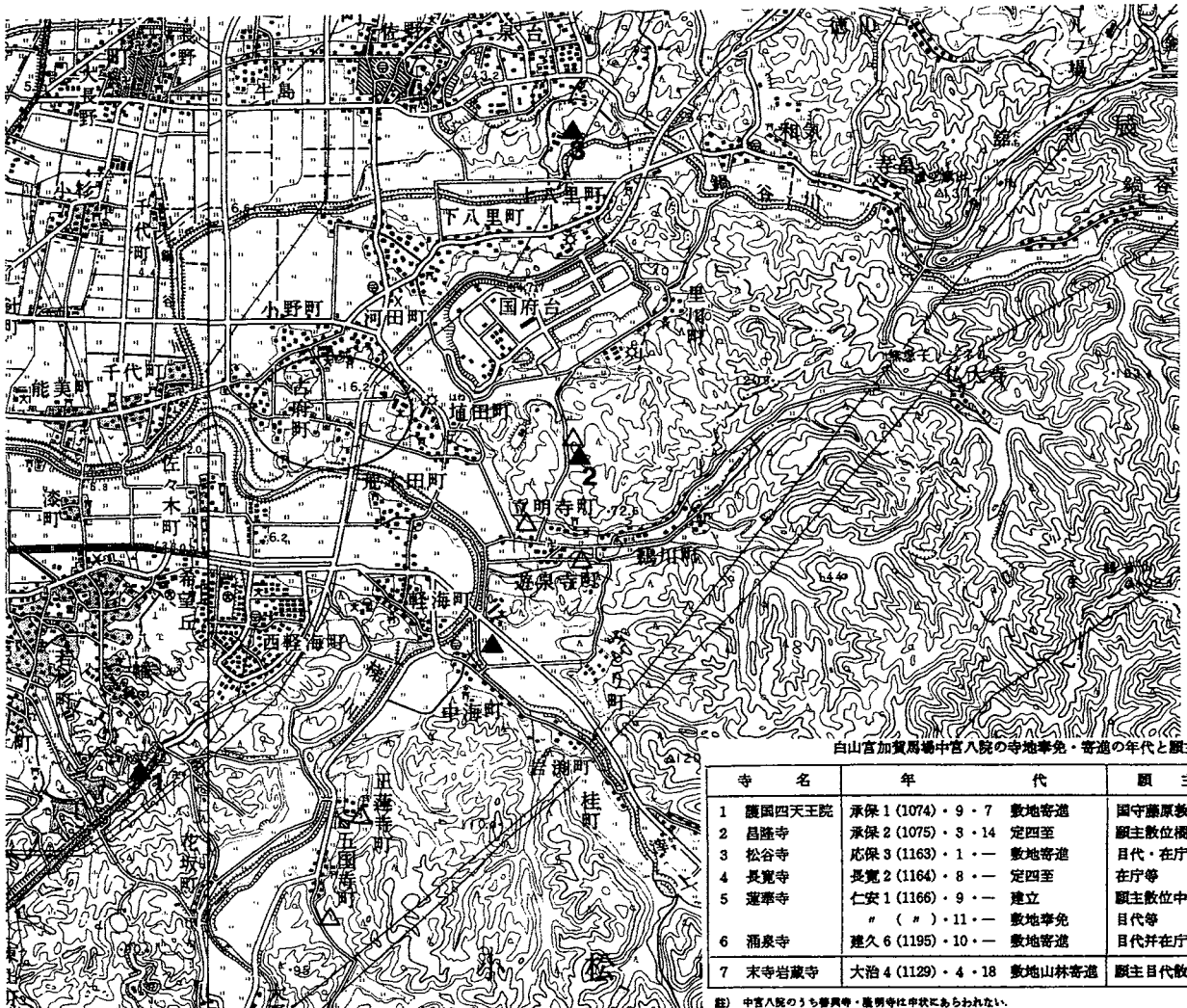
南加賀地方に位置する山間寺院としては、小松東部丘陵から能美丘陵に所在する5遺跡が上げられる。各寺院跡は、平野部からの視野が隔絶された丘陵の南斜面を切盛造成することで、建物の敷地を築き、仏堂とみられる礎石建物や坊舎と理解できる掘立柱建物を配置したものである。

I 山間寺院の遺跡

- 1 浄水寺跡 (期間) 8世紀後半～15世紀中頃 (配置) 掘立柱建物→一堂三宇
- 2 里川E遺跡 (期間) 9世紀後半～10世紀 (配置) 掘立柱建物(?)→一堂二宇
- 3 八里向山B遺跡 (期間) 9世紀前半～(?) (配置) 一堂二宇
- 4 滝谷寺跡 (期間) (?)～中世 (配置) 一堂(?)宇
- 5 宮竹うっしょやまA遺跡(期間) 8世紀前半～12世紀前半(配置) 掘立柱建物+竪穴→一宇

II 寺院の造営と寺内活動

- 1 寺院内での活動
 - ① 写経活動
 - ② 加持祈祷
- 2 山間寺院の造営
 - ① 寺院の立地
 - ② 官寺と在庁



寺院遺跡の位置図

1 浄水寺跡 (出典『浄水寺墨書資料集』)

寺内に多段の平坦地を造成し、掘立柱建物と礎石建物を構築している。法歴は8世紀後半から15世紀中頃まで続き、その変動内容から5期に区分できる。11世紀以降は5×4間の礎石建物(堂舎)を建設し、一堂三宇とみられる建物構成へと整備されている。

所在地：石川県小松市八幡

調査主体：石川県立埋蔵文化財センター

調査年度：1984年

文献：垣内1986, 石川県立埋蔵文化財センター1989a

遺跡の概要

浄水寺跡は、小松市の東部に広がる小松丘陵の北端に位置する通称キヨミズ山(63.5m)の斜面に立地する山寺である。寺院の内部構造は、低丘陵の尾根に三方を取り囲まれた緩斜面が、大きく四段に造成され、そこに大小約20面の整地面が広がる。各整地面からは、奈良時代から室町時代の仏堂跡や僧坊跡などが検出され、雨乞い信仰を介して地元で伝承されてきた「キヨミズデラ」は、平安時代には「浄水寺」と表記する山間の寺院であることが、出土文字資料からも確認されている。

尾根に囲まれた寺域からは、大型礎石建物2・掘立柱建物約30・大溝・閼伽井戸2・室状遺構8・池7・土器埋納穴4・参道などが検出されている。なかでも浄水寺の池の前面に位置する大型の礎石建物は、桁行5間(12m)・梁行4間(10.8m)の規模で、12世紀初め頃に建立された仏堂であるが、その後焼失し、14世紀後半には柱間を広げて再建されている。再建に先立って、堂の中央部で、地鎮・鎮壇供養が執り行われている。また、浄水寺の池も、12世紀にこの仏堂の建設に併せて計画的に開削された水利遺構で、15世紀後半に寺院が転出したあとも、枯葉で埋もれず現在までも水を湛えている。

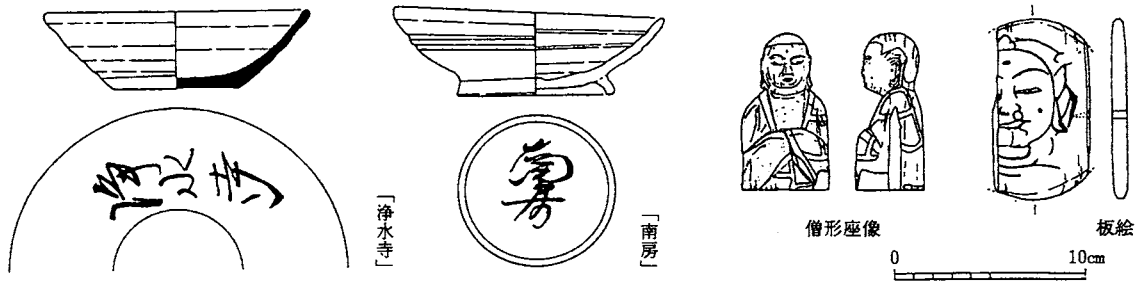
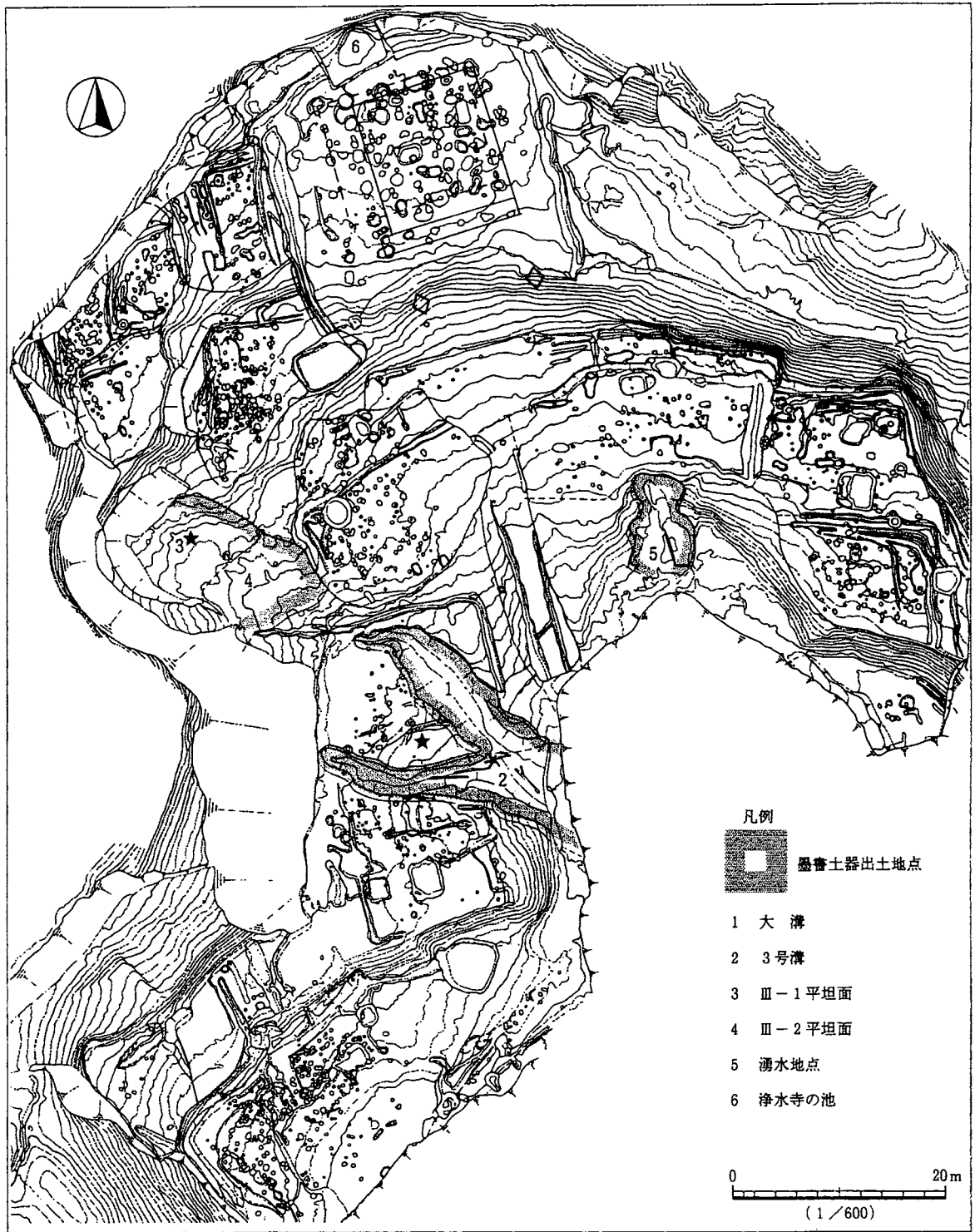
寺院の内部に広がる大小の整地面からは、生活用具の土器や陶磁器と若干の仏具を内蔵した掘立柱建物や方形堅坑が検出され、各整地面の建物が僧坊として機能したことを裏付けている。さらに平安時代の墨書土器を含む大量の須恵器や土師器が出土した大溝は、旧地形では沢状の場所で、沢を渡る板橋が架けられ、上方の水源部には閼伽井戸と判断される方形の木組井戸が設けられている。

この寺跡から出土した遺物は、各種の土器や陶磁器製品を中心として、木製品・金属製品・石製品など、豊富な品々が見られる。とくに平安時代の遺物群でも、大溝などから出土した墨書土器は、総数が1222点を数え、寺名の「浄水寺」をはじめ、「前院」「南房」「中房」「厨」等の寺院内の施設名称、「富」「集」「富集」「吉来」等の吉祥・招福関連、「三坂万呂」等の人名、「神」「仏」「阿難」等の神仏関連の墨書がみられ、種類や内容とも古代の山寺として注目される資料である。

また、初期貿易陶磁器も越州窯青磁(碗・杯・水注)、白磁(碗)、長沙窯(水注)などが揃い、平安京以東では最もまとまった資料である。このため古代後半期には有力な在庁官人の保護を受けていたと理解されるが、中世の鎌倉～室町時代と時代が降ると、寺内の生活用具も僅かな仏具を除くと、里の村跡と大差がない遺物構成へと変化し、周辺の村と同一の経済世界にあったと認識されている。

	富	吉	得	福	生	加	財	万	人	大	田	西	立	力	天	来	集	合	足
富							○	○							○	○	○		
吉							○		○	○						○			
得							○	○								○			
福							○					○				○			
生							○	○	○				○						
加	○	○	○	○	○		○										○		○
財	○				○	○	○												
万		○			○	○	○		○	○				○					○
人		○					○								○				○
大		○					○										○		○
田		○																	○
西				○															○
立					○														○
力									○										○
天	○									○									
来	○	○	○	○															
集	○					○				○									
合														○	○				
足						○		○	○	○									

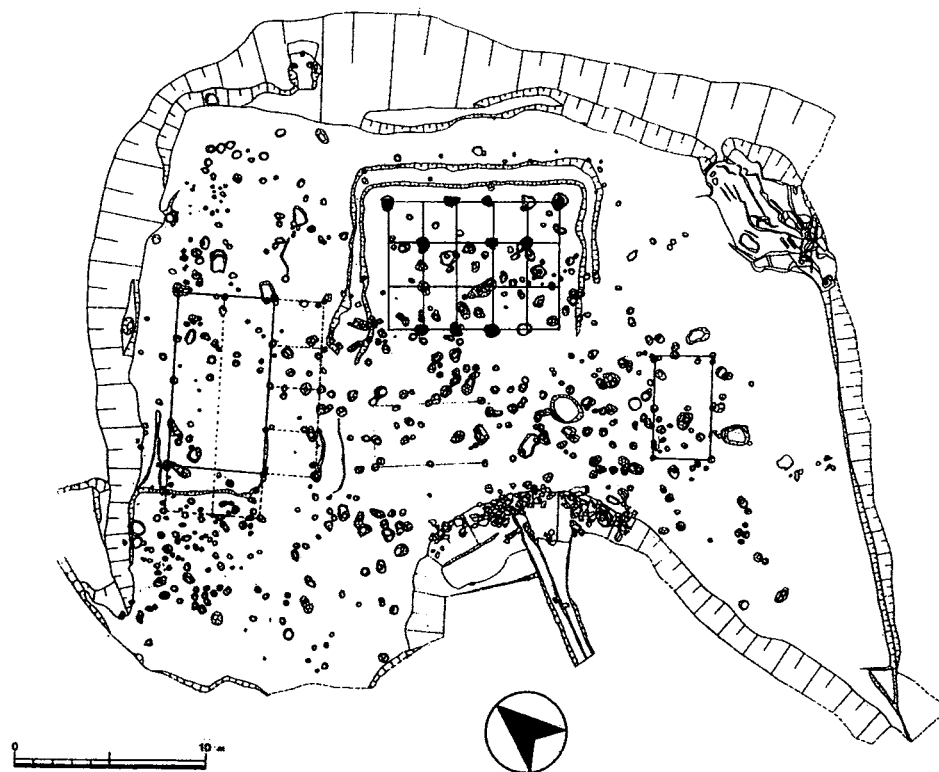
墨書の組合せ



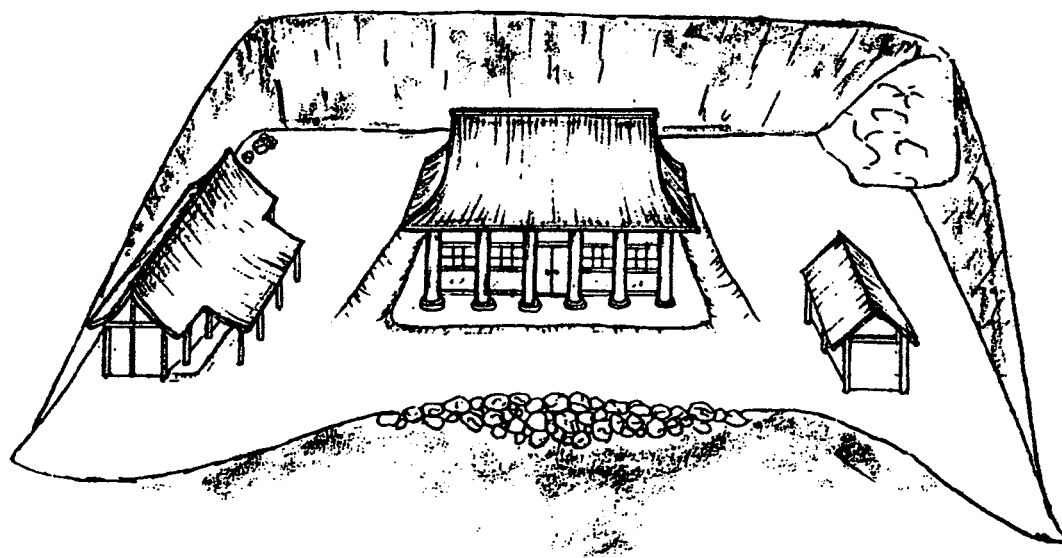
浄水寺の全体図と出土遺物

2 里川E遺跡 (所在地 小松市里川町、典拠 里川E遺跡現地説明資料)

標高約30mの丘陵南斜面に幅40m、奥行き30mの平坦地を造成し、桁行5間(9.1m)×梁行3間(6.6m)の礎石建物(堂舎)と掘立柱建物を建設している。一堂二字の建物は、9世紀後半に建設され、約半世紀ほど存続したと考えられている。



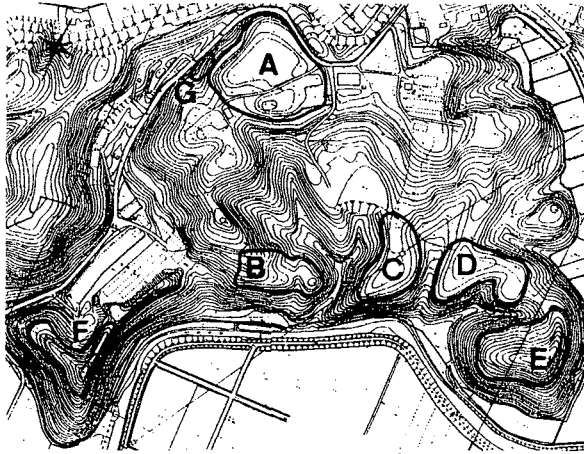
調査区全体図(S=1/400)



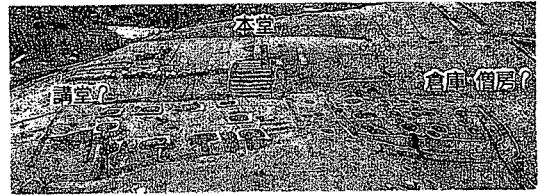
建物の復元(典拠：里川E遺跡現地説明資料)

3 八里向山B遺跡 (所在地 小松市上里川町、典拠 『小松市埋蔵文化財調査だより6号』)

標高約20mの丘陵上で9世紀前半に一堂二字とみられる建物を東面する形で建設している。

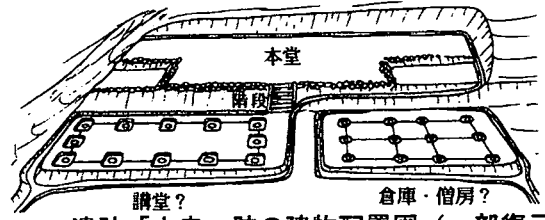


八里向山遺跡群遺跡分布図



B遺跡の「山寺」跡全景

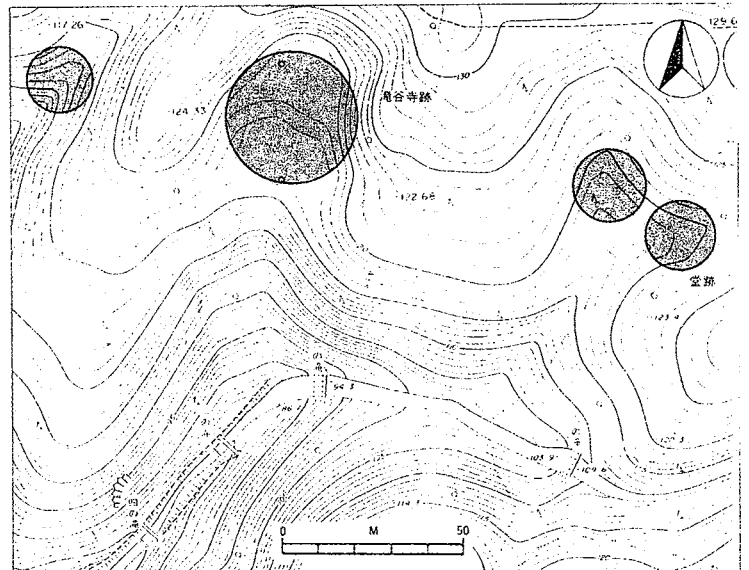
(『小松市埋蔵文化財調査だより6号』p.2より転載)



B遺跡「山寺」跡の建物配置図(一部復元)

4 滝谷寺跡 (所在地 辰口町長滝、典拠 『能美丘陵東遺跡群(概要)』)

滝谷寺跡は長滝地内の南向きの谷間に位置し、名勝「セツ滝」に並行して展開する寺院跡で、1988(昭和63)年度の最初の現地踏査で確認された。東西350m、南北100m以上の規模を有し、造成された平坦面が多数認められる。「寺屋敷」の通称が残る地点では、一辺約20mの平坦面が二段にわたって造成され、それぞれに複数の礎石建物を配している。伝承では中世に栄えた真言宗系の寺院で、保存状態も良好な事から開発区域から除外し、周辺景観を含めて現状保存措置が取られた。



滝谷寺跡地形図(1/2000)



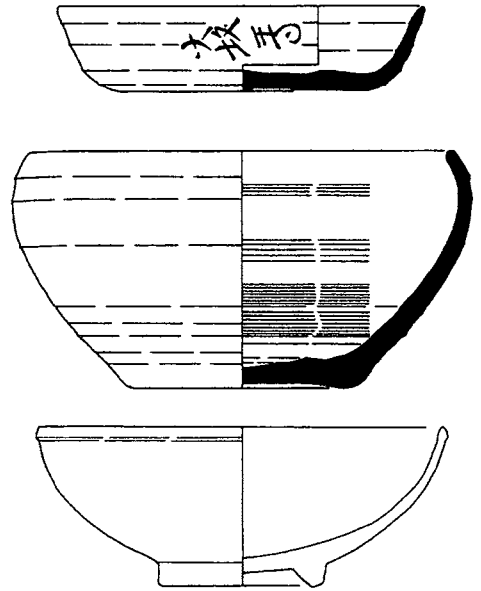
滝谷寺跡全景(石川県立埋蔵文化財センター1996『能美丘陵東遺跡群(概要)』p.28より転載)

5 宮竹うっしょやまA遺跡 (所在地 辰口町宮竹、典拠 『能美丘陵東遺跡群Ⅲ』)

標高115m前後の丘陵南斜面に立地した遺跡で、8世紀後半から12世紀前半代に営続している。堅穴住居、掘立柱建物、礎石建物で構成されるが、その内容から大きく3期に区分できる。



能美丘陵東遺跡群遺跡分布図



主要出土遺物



建物遺構全体図

0 10m